黒犬異世界奇譚

黒い悪魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒犬異世界奇譚

【Ｎコード】

Ｎ９３６２Ｙ

【作者名】

黒い悪魔

【あらすじ】

平凡な会社員、西崎眞也はトラックに突き飛ばされてご臨終。が、気づいたら黒毛のワンちゃんに転生！？しかも転生先は異世界だった。犬に転生しちゃった主人公と、そのうち加わる愉快な仲間の物語。異世界モノを読みあさっているうちに無性に書きたくなったので投稿。そのうち主人公がチートになるかもしれないので苦手な方はご注意を・・・。

プロローグ

俺の名前は西崎眞也。冴えない２１歳会社員だった。特技はどこでも寝られること。環境適応力が高いと自分では思っている。ちなみに恋人はいない。趣味は読書でラノベから推理小説まで手広く読んでいて、音楽もそこそこ好きな、それこそどこにでもいるような人間だ。

そんな俺は、いつものように晩酌をして床に着こうと冷蔵庫を開けるものの、目当てのビールもとい、発泡酒が無いので近くのコンビニに買いに行くことにした。

これが運の尽き・・・というか命の尽きだった。

５００円以上購入でできるようになるクジでビール（これは本物）が当たったので、終始ゴキゲンで夜の道路を愛車のママチャリを漕いでいた。

自宅のアパートとコンビニまでのルートには大きな国道があって、それを渡らなければならない。いつものように横断歩道をキコキコと渡っている時だった。

ギャリギャリと不快な音と共にペダルが動かなくなった。

チャリのチェーンが絡まったのだ。

「うぇー直すのメンドクサー」

とそんなことも言ってられないので、下車しチェーンをいじる俺。
さほど時間もかからずにチェーンは直った。
と、信号が点滅してたのでさっさと渡りきろうとした時だった。
横からの強烈な光に目がくらむ。そこには止まる気配が感じられないトラックが迫ってきていた。
（は？）
一瞬、思考が停止する。その間はコンマ一秒もなかったと思う。
俺の体が激痛と浮遊感を感じた。目前に迫り来るコンクリートを見つめながら、久しぶりにビールが飲めたのになぁ、なんて下らないことを思った。
そして意識が刈り取られる。俺、西崎眞也はこの時をもって、死んだ。

□　□　□

ハズだ。そう、俺は死んだはずなのだ。あんなスピードで大型トラックに突っ込まれ、宙を舞い、あまつさえコンクリに頭から落ちて

いったのだ。助かるはずがない。

なのに気づいたら意識があった。

俺の目には、どこまでも広がる青い空が映っていた。体の自由はどうやら利かないみたいだ。仕方がないからずっと空を眺めていた。

鳥が気持ちよさそうに空を泳いでいた。排気ガスの感じられない、爽やかな風が頬を撫でていく。

どれくらいっただろうか、まるで急に金縛りから覚めたみたいに体が言うことを聞くようになった。ずっと地面に仰向けで寝転がっていたから背中が痛くてしかたない。

そして俺は、４本の足で立ち上がった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４本の足！？

え？４本の足ってどういうこと？自分で立ち上がっておいて、なぜ４本の足で立っているのか理解できなかった。

恐る恐る、自分の前足を見てみる。艶やかな黒い毛皮に覆われていた。

『なんだとぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！？』

と叫んだつもりが、喉から発せられるのは、

「きゃうーーーん！？」

と、犬の叫び語。

その瞬間、俺は悟った。

そう、俺は犬に転生してしまったのだ。

第一話　転生速攻あの世行きコース

一旦状況を整理しなければ。

俺はトラックに轢かれて死んだ。これは間違いない。あの痛みは本物だ。が、気づいたら犬になっていた。鏡やら何やらで確認していないから、実際は犬ではなくかもしれないが、四足の犬っぽい何かに転生しれしまったのは確実だ。さっきから声に出して見ても

「わん！」

『こんにちは！』

とか、

「くぅ～ん・・・」

『ごめんなさい・・・』

とかにしか発音されない。別に意図して犬語をしゃべっているわけではない。まるで、声にでる瞬間に自動翻訳されているみたいだ。

そして、俺が今立っている場所は、明らかに日本じゃない。どこまでも続いている野原と、遠くに見える山々。鬱蒼とした森も見受けられる。申し訳程度にある獣道とほとんど変わらないような道が、遠くに見える街へとつながっているみたいだ。轍や、蹄の後が見えることからおそらく馬車でも通っているのだろう。俺はその道の真中に倒れていた。道幅は2メートルぐらいはあるだろう。犬は鼻が効く代わりに目が悪いと聞いたことがあるが、俺はすこぶるよく見

える。生前・・・というか人間だった頃より遥かに良い。
明らかに日本じゃない。ひょっとしたら地球ですらないのかもしれないと思えてきた。さすがにそれは小説の読み過ぎだと思うが・・・。

と、何やら嫌な臭いがしてきた。これは・・・獣のような臭いか？
ぐるりと見回してみるも、何者かの影は見当たらない。嫌な予感がしたので逃げようとした時だった。
一際臭いが強くなったと思ったら、黒い影が急に現れた。

（は？）

思考停止していると瞬く間にその黒い影に囲まれた。

「グルルゥゥゥゥ」
『エサダ、エサダ』『ハラヘッタ』『ヨワソウ、タベル』

などと物騒な声を上げるデカイわんちゃんたちだった。５頭ぐらいだろうか。よくわからないが、同じ犬だからなのか相手の言っていることが理解できる。

（やっぱり、俺は犬なんだァ）

などと感慨にふけっている場合ではない。奴らは明らかに俺のことをエサだと思っている。が、逃げようにも完璧に退路を塞がれている。

「わ、わん、くぅん！」
『ま、待て、話し合おうじゃありませんか！』

と意思の疎通を図ってみる。

「ガルゥゥ！」

『タベル！』

どうやら意思の挿通は無理みたい・・・。やべぇ、転生して速攻あの世行きコースかも・・・。

じりじりと包囲が狭まってくる。そして、一斉に俺へと跳びかかる！

（おいおいおい！！！まじかよ！？）

俺は恐怖のあまり固く目を閉じた。

第二話　銀髪の戦乙女

（あぁ、終わった。これで俺の第二の人生も終了かぁ・・・。短かったなぁ・・・）

固く目を閉じ、来るべき衝撃に耐えようと身を硬くする。
なにやら、ふわりと優しい香りがした。獣達の嫌な匂いの中、そんな香りが出てきたのが、あまりにも不思議で、目を開ける。

「ハァァッ！！！」

そこに俺は戦乙女を見た。
流れるような斬撃が恐ろしい犬たちを斬り伏せていく。突然の奇襲に犬たちはなすすべなく斬られてゆく。

美しい銀線と彼女の立ち回り。まるで剣舞を踊っているようだった。
飛び散る血飛沫さえ、彼女の剣舞をより美しくするための演出みたいだ。

（綺麗だ・・・）

危機的状況にも係わらず、俺は彼女の戦いに目を奪われた。
あという間に2頭を仕留めた彼女は、

「次は誰が相手かな？弱いものいじめする奴は容赦はしないよ」

と俺を庇うように立つ。おぉ、なんという頼もしい背中！

風に吹かれ、なびく銀髪。右手には細身の剣が握られていた。
防具は・・・アレは皮か何かだろうか？あまり重装備には見えない。
おそらく動きやすさを重視しているのだろう。

「グルルゥ」「ガウッ！！」
『チカズクナ』『ジャマスルナ！！』

そんな声が聞こえてくる。

「まだやる気？」

やれやれといった風に肩を竦める彼女。

「仕方が無いなあ。さっきは気配を消してたから奇襲に成功したものの・・・」

剣を構え直す、銀髪の戦乙女。見た感じ、俺より年齢は結構低そうだ。１６ぐらいだろうか？

「さすがに3匹同時は仕留め切れないか・・・」

「グルルル」

犬たちは牙を剥き出しに唸っている。

「ならば・・・我が手に宿るは激情、火炎！」

左手を前に突きつけると、魔方陣のようなものが出てきた。

（って、魔方陣！？）

すると、魔方陣が輝きを放ち、炎が吹き出して犬たちの足元を焼いた。

「きゃんきゃん！！」

『ニゲロ！！』

犬たちは炎に驚いたのか、一目散に逃げていった。

「っとに、なんで同じ犬だってのにグラドッグは餌としか考えられないんだろうね」

剣についた血糊を拭きながらこちらを振り向く。

「怖くなかったかい？大丈夫、私は敵じゃないよ」

剣を腰の鞘に収めた彼女はしゃがんで、俺と目線を合わせようとする。

瞳は赤く、銀髪と相まってとてもきれいだ。そして、すっと通った鼻に、白い肌。

「わふーん・・・」

『超絶美少女・・・』

思わず声が漏れた。

「おうおう、怖かったんだねー」

といって抱き上げてくれる。

（うおぉぉぉぉぉ！！！）

やべぇ、犬に転生して良かった！

全力で尻尾をフリフリ。

「ははははっそんなに嬉しいか！」

クシャクシャに撫で回される俺。イジられるよりもイジりたい俺だが、この際そんなことはどうでもいい。

正直、抱きあげられているという事実もさることながら、命が助かったことに感激していた。彼女は俺の命の恩人だ。

「ワンコ、両親はどうした？ってそんなこと聞いても分からないか」

「ふるふる」

いないよ、という意味を込めて首を振る。あ、今胸に当たった。革鎧ごしだったけど。

「ワンコ、私の言葉わかるの？」

「わん！」

『もちろん！』

目を丸くする彼女。

「ひょっとして、高位の魔獣かなんかの子供？ここまではっきり私の言うこと分かるなんて・・・」

「わぅん？」

『はい？』
「さすがにそういうことは分からないか」
コウイノマジュウ？ひょっとして高位の魔獣ってことか？
さすがにそれはないと思うなぁ。てか、俺に親なんかいるのか？気づいたらこの姿で道端に寝ていたんだけど。ひょっとして、俺はイレギュラーな存在なのかもしれない。
体が世界に馴染めなくて消失なんて、よくある話じゃないか。ま、まぁ、1時間近く（体感だけど）いるのに気分が悪くなったり、体が軽くなったり透けたりしていなから大丈夫だろう。
「私の言葉がわかるなら、一応自己紹介しておくか」
俺を地面に下ろす。そして、しゃがみんで目を見つめてくる。
「私の名前はセシリア。セシリア・クレントだよ」
「わうん！」
『いい名前です！』
しかし、この子・・・もといセシリアは人の目をちゃんと見て話す子だなぁ。あ、今は人じゃなくて犬か。
しばらく俺の顔を見ていたセシリア。
（そ、そんなに見つめられると恥ずかしいじゃないか）
が、その澄んだ赤い瞳からは目を離すことが出来なかった。
「なぁ、ワンコ。君は一人ぼっちなんだよね？」

「わん」
『うん』

じっと俺の目を見てくる彼女。

「なら、私と一緒に旅をしない？」

そういって俺に手を差し伸べる。
とびっきりの笑顔も一緒に俺へ向けてくれる。

「私も独りで旅を続けるのは寂しいしね。きっと、楽しいよ！ワンコが見たことないような景色がこの世界には広がっているんだよ！！！それを一緒に見れたらモット楽しいと思わない？」

どう？とばかりに小首を傾げるセシリア。こんな犬っころに真摯に言葉を投げかけてくるのは、俺が人語を理解できると分かってる以上にこの子が純粋なんだろう。

俺はこの世界では1人じゃ何も出来ない弱い存在だ。世界のことも何も知らない。それに俺自身、この世界のことをもっと知りたいと思った。一緒に旅するなど、渡りに船だろう。

まぁ、単純にセシリアのことが気に入ったというのもある。可愛いし、強いし。ストライクゾーンど真ん中ではないが、ガッチリ俺の心を掴むだけの魅力はある。

そんな一抹の下心も込みで俺は、

「わふん！」

『よろしく！』

ぽふ、と差し伸ばされた手にお手をする。

こうして、１人と１匹の旅が始まった。

第三話　ネーミングセンス

「そうだ、ワンコの名前を決めなくちゃ！」

俺と一緒に旅をすることを約束したセシリアはポンと手を打つ。

「いつまでもワンコだったら可哀想だしね」

歩みを止め、どんなのがいいかなぁ？と腕を組みうんうん唸る銀髪美少女。可愛い。癒されるなぁ・・・。

俺とセシリアは平原の街デリアンへと向かっていた。俺が倒れていたところから遠くに見えた街がそうだ。なんでも、色んな街からの物資が集まる大陸の中心地的存在で非常に賑わっているとのこと。セシリアも初めて訪れるらしく、凄く楽しみだそうだ。大陸やら周辺の街については教えてくれなかった。こういう時に、自分から質問ができないのは不便だ。

「そういや、ワンコはオス？メス？」

・・・どっちなんだろ？中身は間違いなくオスだが、外側までオスとは限らない。

「・・・ちょいと失礼」

俺に手を伸ばすセシリア。

ま、まさか！？

「き、きゃうん！！」

『ま、まてぇい！！』

と暴れてみるも、

「まぁまぁ、ちょっと確かめるだけだから」

といって、強引に持ち上げられる。女性とはいえ、戦士である彼女に力で敵うはずもく、どだい犬の体で出せる力などたかが知れている。

「ほほう、男の子でしたか。失礼しました～」

「くぅん・・・」

『ぐぁーー』

りょ、陵辱された・・・。もうお嫁にいけない・・・。

「なはは、やっぱり知性があると羞恥心もあるんだねぇ」

としゃがんで俺の頭をぐしぐしと撫でる。

「涙まで溜めちゃって。ごめんごめん」

お詫びとばかりに頭やら首やらをわしゃわしゃされる。俺はどうやら子犬ほどの大きさのようで、小柄な彼女の手でも大きく感じた。

「男の子と分かったことだし、強そうな名前を付けようじゃないか」

「わうん」

『お願いします』

俺はもう、この世界で生きることを決めた。生前使っていた名は日本での名だ。ここで生きていくならば、ここでの名をもらおう。

そんな俺の一大決心をよそに彼女は楽しげに名前を考えていた。

が、この名付け作戦は、予想以上に長引いた。

□　□　□

「くろ吉！」

「がぶ」

「これもだめぇ！？」

最初は、セシリアが名付けるならどんな名前でも受け入れようと思った。これから旅を共にする仲間なのだから、適当な名前を付けないだろうと思っていたし。

ところがどっこい。

彼女にはネーミングセンスが皆無だった。

「よし、今日からお前はクロだ！」

開口一番、これだよ。どんだけセンスないんだよ。
フフンと偉そうに指を立てていたので、拒否の意をこめてその指にガブリ。
その後も何個か案が出たのだが、どれも酷いものばかりだった。

「レオン！」
「がぶ」

俺は猫科じゃなくて犬科です。

「クロゲ！」
「がぶ」

和牛じゃありません。

「漆黒の牙！」
「がぶ」

厨二かよ。しかもどっかのＲＰＧで聞いたことあるぞ、それ。

「ワンワン！」
「がぶり」
「いたい・・・」

投げやりにも程があります。
てか、痛いならいちいち指を立てるなよ。噛まれるの分かってるだろうに。

とまぁ、こんな感じ。

「うぅぅ、頑固だよぉ！」

「ばう！」

『テキトーすぎだ！』

中々決まらず、このままだと一向に街に進まないということで歩きながら決めることに。

「名付けるのがこんなに大変だとは・・・」

俺も別にまともなのならいいんだよ？でもさ、それにしたってネーミングセンスひどくないかい？

とうとうセシリアの限界が来たのか、

「だぁーもう、お手上げ！」

と考えることを放棄してしまった。

「お前ぇー選り好みし過ぎなんだよー」

と強めにわしゃわしゃされる。

そんなこと言われてもなぁ・・・。セシリアのセンスがなさすぎるんだよ。

□　　□　　□

そんなこんなで、結局名前は決まらず、二人でのほほんと街に向かっている。

天気は快晴。空はどこまでも広がっている。
こっちの世界にも太陽はあるんだなぁ、でも地球のよりも大きい気がする。なんてことを考えながら、セシリアの後をトコトコついていく。

「そろそろ休憩しようか。さっきから歩き続けてるし、私もさっきの戦闘でだいぶ疲れちゃった」

近くの木陰に移動する。セシリアは木にもたれ掛かるように座った。腰につけている剣もベルトごと外す。俺はその隣におすわり。

この平原にはあちらこちらに木が見受けられる。近くには無いが、遠くの方には大きな森も見える。セシリアに出会う前に見つけた森とは別なものだ。

「早く美味しい料理がたべたいなーっと。はい、干し肉」
「むぐむぐ」

セシリアがバックから出した干し肉を分けてもらう。余談だが、こ

のバック、実は俺が探し当てたものだ。俺を助けに来たときに、戦闘に邪魔なバックをそこら辺に投げ捨てたらしいのだが、セシリアはどこに投げたのか覚えていなかった。

そこで活躍したのが俺の嗅覚というわけだ。

軽く腹ごしらえしつつ雲の動きなんかをぼんやり二人で眺める。優しい風がそよそよと吹いていて、その音も耳に心地いい。とても、ゆったりと落ち着いた時間だ。

「そうだ」

何やらセシリアがカバンをゴソゴソし始めた。

「じゃじゃーん」

取り出したのは木の棒みたいなの。なんだこれ？と見ていると、

「これはねぇ、笛なんだよ！私のおじいちゃんが作ってくれたんだ」

そう言って彼女はその笛を吹いた。

その笛の音はとても澄んでいて優しげな音色だった。さわさわと風が奏でる音と、彼女の吹く笛の音がコーラスしているかのようだった。

暖かで、心を落ち着かせるその音色は風にのってどこまでも届いていきそうだ。

□　　□　　□

どれくらいセシリアの笛に聞き惚れていただろうか。彼女の笛が止む。なんだか、心が癒された感じだ。とてもゆったりとした時間だった。

「やば・・・こんなのんびりしてたら夜になっちゃう！」

セシリアが急に立ち上がる。

「まずい！急ぐよ！夜になったら魔獣たちがウヨウヨし始める！」
「わうーん！？」
『なんだってー！？』

慌てて笛をバックにしまうセシリア。と、そこである臭いがしてきた。

これは・・・馬？

「わん！」
『セシリア！』

セシリアを呼ぶ。名前を読んでいることは分からないだろうが、俺の今までにない強い声に何事かと俺を見る。

「なに？」

臭いのする方を向き、吠える。

「もしかして、敵？」

真剣な眼差しになり、手早く剣のベルトを腰につける。

と、パカラッパカラッと蹄の音が聞こえてくる。それにガラガラと何かを引く音も聞こえてくる。

「この音は・・・」

徐々にその音が大きくなり、音の発生源も見えてくる。

そう、馬車だ。

「やった！これに乗せてもらえれば陽が沈む前に街に行ける！」

「わん！」

『ラッキー！』

どうやら危険でいっぱいな夜を過ごさなくて済みそうだ。

第四話　馬車の中で

ガタゴトと馬車がゆく。

運良く、ちょうどデリアンへと向かっている商人の馬車に乗せてもらえた。ヘルキンスというふくよかなおっさん商人で、主に織物を扱っているそうだ。馬車は大きな作りで、人が一人増えた所でなんの問題もなかった。

御者台には護衛のルイというブラウンヘアーのあんちゃんがいる。冒険者（ハンター）だという。

どうやら、この世界には冒険者なるものがいるらしい。俺の予想が外れていなければ、ギルドもあるはずだ。

まぁ、あちらこちらに魔物はいるし、行商人やら街への移動の際には何かと入用なんだろう。自分の身は自分で守れなんて、限界があるし。戦闘のスペシャリストが必要とされるのも当然か。

ん、何やらヘルキンスとセシリアが盛り上がっているみたいだ。

「して、セシリアさんはどこから来たんですかい？」
「私はセントレリアから来ました。出身はリーランド王国です」
「なるほど。銀髪でしたからもしやと思ったんですが、やはりノース大陸の方でしたか」
「ノースに来たことがあるのですか？」
「えぇ、若い頃に何度か。ゼリア大陸の者にはちと寒すぎましたがな。がっはっはっ」

豪快に笑うおっさん。なんか、これぞ商人って感じの人だな。

にしても、幾つかの地名が出ていたな。話の内容からすると、俺たちが今いる場所はゼリアと呼ばれる大陸か。んで、その他にもノースという大陸があってそこはセシリアの故郷。

うーん・・・。やはりただ話を聞いているだけでは大した情報は得られないなぁー

まぁ、犬だから大陸のことやら国のことなんぞ知らなくても全く問題はないけど。

「ところで、そのペットは？ずいぶん美しい毛並みだ」

お、なんだか褒められたぞ？毛並みを褒められるのがこんなに嬉しいとは。

尻尾をぱたぱた。

「喜んでるみたいですね。この子はさっき拾ったんです。グラドッグに食べられそうになっていたところを保護したんです」

「ほう。それにしては随分とあなたに懐いているみたいだ。騒ぎもしない。あなたの人柄の良さがわかりますな」

「そんな、この子がとっても頭がいいだけですよ。私の言うことが分かるみたいなんです」

「これはまた。ひょっとしたら高位の魔獣の子かもしれませんな」

キラリとヘルキンスの目が光る。

こいつ、俺を売り飛ばすつもりか？確かに高位の魔獣の子なんかそうそう手に入る物じゃないだろうし、結構な値がつくだろうけど・・・

・。

「この子は私のお供です。あげませんよ」

ぎゅっと俺を抱くセシリア。暖かい。

「がっはっは！これはこれは、失礼。癖でしてね。こうやって珍しいものを見つけると売りたくなるのが商人の性でして」

「絶対にダメです！」

「いや、本当に失敬。それはそうと、本当にこの子が高位の魔獣の子だとしたら厄介ですな」

ん？なんで厄介なんだ？

「この子を取り戻しにやって来るやもしれない」

「そこは大丈夫です。この子には両親がいないみたいで。いたら、道端に放って置くなんて考えられないし・・・」

「それはその子から聞いたのですかな？」

「はい。両親はいるのと訊いたら首を横にふりました」

「ふむ。両親のいない魔獣か、神の気まぐれで魔力が宿った犬か」

「どちらにせよ、魔力を持っていることだけは変わりないですね」

ゑ？俺って魔力持ってるの？マジで？魔法とか使えちゃうわけ？

「あなたは冒険者のようですし、デリアンについたらギルドに魔獣使いの登録をしたほうが良いですな」

「私は別にこの子を従えているわけじゃ・・・」

「まぁまぁ、便宜上ですよ。魔獣使いとして登録しておけば、魔獣ＯＫな宿で割引も効くし、魔獣使いに人気な、剛力や俊足、鉄壁といった補助魔法も割引されますぞ？」

「うっ・・・それはかなり魅力的・・・」
「まぁ、難点といえば、パーティーが組みにくいことでしょうかな？如何せん、『魔獣は魔獣』という考え方を持っている方が少なからずいますからなぁ。信用できんということでしょうな」
「そんな偏見を持っている人とは組みたくないのでちょうどいいです」
「がっはっは、これは中々に肝が座ったお嬢さんだ」

セシリアは純粋だな。犬の俺と対等であろうとするなんて。
まぁ、人語を理解できるってこともあるんだろうけど。けど、俺が例え人語が理解できなくても、セシリアは俺と対等であろうとするんだろうなと、なんとなく思った。

「随分と冒険者に詳しいんですね」

俺のそんなことを思っているうちに話は進む。

「私はこれでも昔、ギルドの職員をやっていましてね。最初はそんな気はなかったんですがな、ギルドに訪れる冒険者たちを見ていると自分も世界を回ってみたくなりまして」
「なるほど、それで行商人に」
「えぇ、戦うのは苦手でしたし、冒険者にはなれないと思ったので、商人なら世界を回りながら仕事が出来ると思ったもので」

へぇー風貌からして根っからの商人って感じだけど違ったのか。あーひょっとして商人とはこうあるべきみたいな概念から、こんな感じになったのか？形から入るタイプか。

「ところがどっこい、そう簡単に商人としてやっていける筈もなく、始めは分からぬことばかりで右往左往しておりましてな・・・・・・

」

あ、長そうな話がはじまったぞ。

□　□　□

「わぅ」

『んぁ』

話は結構面白かったのだが、どうやら疲れていたみたいで寝てしまったようだ。セシリアの膝の上で。至福。

外はもう夕方だ。嫌な臭いがする。おそらく夜にうじゃうじゃ出てくる魔物たちの臭いだろう。幸いまだ近くにいないみたいだけど。

「で、ようやっと、その生地を届けることができたのです」

「うわぁ、そんな場所があるんですね！」

「えぇ。その時ばかりは終わったと思いましたね」

そのセリフ3回目ぐらいじゃないか？しかし、セシリアもよくそんなに食いつけるな。たしかに話は面白いけど。

その後もヘルキンスの話は続いた。このおっさんもよく話が出てくるな。

と、ガタンッと馬車が止まる。

どうやら街に着いたみたいだな。

第五話　交易都市デリアン（前書き）

ご指摘、ご感想があればコメントお願いします

第五話　交易都市デリアン

「さぁ、みなさん降りてください。デリアンに着きましたよ」

俺たちは、ブロンドヘアーの兄ちゃん（確か、ルイとかいう奴）によばれて外へ出る。

どうやら、街に入るには手続きをしなければならないらしい。積荷の確認も必要なんだとか。

「ここがゼリア大陸でもっとも栄えている内陸交易都市、デリアンですぞ」

「ここがデリアン・・・」

交易都市、デリアンは川に浮かんだ都市だった。

向こう岸が霞んで見えるくらいデカイ川の真ん中に街が浮かんでいる。が、川の水が淀みなく流れている。なにやら凄い建築技術の粋が集まってそうな造りをしているのだろう。

夕日に照らされて幻想的な雰囲気だ。

街までにはこれまた大きな橋があり、街の入口の門には兵士らしき武装した人たちが立っている。

「すごい・・・川に浮かんでる・・・」

「確かにそう見えますなぁ。実際はデリアン川の中洲に造られた都市ですぞ」

ヘルキンスの話によると、中洲にできた街がどんどん大きくなって

いき、技術の発達とともに中洲の外側にまで街が広がって出来た都市らしい。

「このデリアン川は北のリース山脈から流れでて、カリア海に流れ出る川でその周りにはいくつもの街が点在しておるのですよ」

やっぱり、川ってのは大事だなぁ。日本も古来は川が重要だったしなー

「さぁ、お話はそこらへんで。一向に橋を渡らない私達を兵士達が怪しんでますよ」

ルイが早く早くと催促したので、みんなで橋を渡る。

「わざわざ橋の前で止まらんでもそのまま渡れば良かったんだがの」

「せっかく初めてデリアンにいらっしゃるんですから、このスケールの凄さを見てもらわないと」

「確かにな。こんな都市は他の国にはないからの。それにしても、お前はデリアンが大好きだのー」

「根っからのデリアンっ子ですから」

「ルイさんはデリアンの出身なんですか？」

なんてことを話しているうちにすぐに兵士達のところまで来た。

「ここに名前と職業を書いてください。ちゃんと直筆でお願いします」

「デール・ヘルキンス、行商人っと。はい、通商許可証」

「確認しました」

ルイとセシリアも名前と職業を書く。

「冒険者（ハンター）の方は冒険者証（ライセンス）を見せて下さい」

ルイが手を兵士の前に手をかざすと何やら指輪が光り、文字が浮かび上がる。

「ルイ・カーライド、D級冒険者、ディレーブ国デリアン支部所属。確認しました」

どうやら、浮かび上がったあの文字に個人情報が書いてあるのだろう。

セシリアも手を兵士にかざす。と、ルイの時と同じように文字が浮かび上がる。なんて書いてあるかは読めない。

「セシリア・クレント、D級冒険者、所属なし、身元保証はリーランド王国支部、ディレーブ国での保証はセントレリア支部。確認しました。随分と遠くから来られたのですね」

「えぇ。世界を旅して周っているいるんですよ」

「若いのに、頑張ってますね」

「ありがとうございます」

「あ、そちらのあなたのペットですか？」

「はい。ひょっとして、何か問題あります？」

「あ、いえ。あなたのペットなら問題なしです」

ふむ。兵士というのだから、もっと高圧的な奴らかと思ったらそうでもないんだな。

「積荷の確認終了。問題なしだ」

「どうぞ、通って構いませんよ」

□　　□　　□

兵士たちが、門を開けてくれる。そして、その門をくぐる。

と、賑やかな街の様子が俺たちの目に飛び込んできた。

す、すげぇ・・・。めちゃくちゃ活気があるぞ。恐るべし、交易都市デリアン。

「わぁ・・・すごい！色んな人がいる！」

「すごいもんでしょう？これがデリアンですぞ」

「ここは交易都市なだけあって様々な地域から人と物資が集まります」

ここは大通りみたいで、いくつもの店が道なりにそって軒を連ねている。人はとても多く、かなりの賑わいを見せている。時々、耳の尖った人や、尻尾を持った人などが見受けられる。

街並みは・・・なんだろう？統一性が全くないが、それでいてぴったりとピースがハマっているような不思議な感覚する街だ。基本は石造りの街並みなんだけど、出店や、人々の服装、顔つきなど、どれをとっても統一性が見られない。にも係わらず、違和感は全く感じられない。

「さて、私は商会の方に物品を届けてくる。ルイ、お前の報奨金はあとで支部の方に入れておく」
「分かりました」
「報告に行くついでにセシリアさんをギルドに連れていってくれないか？」
「あ、そうですね。セシリアさんも冒険者ですし、もし何日か滞在するならお金も必要ですし」
「よろしくお願いします」

では、とヘルキンスが馬車を引き連れて遠ざかっていく。この大通りはかなりの道幅があり、馬車くらいなら余裕で通れる。まぁ、ちょっと通行人は邪魔くさそうだが・・・。

□　　□　　□

2人と1匹で店を冷やかしながらギルドへと向かう。
ルイの提案で、街を案内しながらギルドへ行くことになった。
「それにしても、本当にたくさんの人種がいますね。亜人族の方とかは差別されることが多いのに、みんな、楽しそうにしてる」
「この街は、歴史的に差別の少ない街なんですよ」
ルイが誇らしげに街について語る。

「元々、ここに街を作り始めたのは、シンジーク旅団という世界をまたにかけた大規模隊商（キャラバン）なんです。かなりの人数がいて、４００人以上いたらしいです。世界を周っているぐらいだから、人族だけじゃなくて、エルフや様々な動物の亜人族が隊商にいたそうです」

「それっていつぐらいの話なんです？」

「今から１００年ほど前。ちょうどグランドヘイツ大戦の最中です」

「それってたしか、人族と亜人族とで起きた戦争ですよね？」

「えぇ。その戦争の影響で、亜人族や精霊族といった人々を抱えている旅団は人族から狙われたんです。その手から逃れるために、このデリアン川の中洲に自分たちの居住区を造ったんです」

ほー、ようは難民の街だったんだな。

「彼らは旅団のコネを利用して、食料や衣服などといった生活必需品を川を通じてやり取りしたんです。その内に、旅団が造った街の噂が広まり、戦争で行き場をなくした、亜人族がどんどん移住してきたんです。それに、人族も。はじめはいざこざが絶えなかったそうなんですが、徐々にその関係も回復していったそうです」

「そうやってできたのが、この街なんですか」

「だから、ここには様々な人種の方が住んでいるんですよ」

と、デリアンの成り立ちについての講義を聞いていたら、ふと、美味しそうな臭いが漂ってきた。

くぅ～とお腹がなる。

「ん？なんだ、お腹すいたの？」

セシリアが俺を抱き上げる。

「わう」
『腹減った』

「可愛いですね。この先に繁華街がありますから、そこでご飯を食べるといいですよ」
「ひょっとして、この子、その臭いを嗅ぎつけてお腹がなったのかも」

ご明察です、セシリアさん。

「その前に、ギルドの方に行かないと閉まっちゃいますから、先にギルドに行きましょう」
「そうですね」

「わぅ・・・」
『俺の飯が・・・』

第五話　交易都市デリアン（後書き）

１２月７日改変
冒険者証の読み方を『ハンターカード』から『ライセンス』に変更致しました。

第六話　魔獣使い（前書き）

読み方変更のお知らせ
冒険者証の読み方を『ハンターカード』から『ライセンス』
に変更致しました

第六話　魔獣使い

「ここがデリアン支部です」

俺のお腹がなったところから、さほど離れていない場所にギルドはあった。

見た感じは、そこいらの家と大して変わらない、石造りだが入り口は大きく、両開きの扉になっていて、目立つのように看板が着けられている。文字が書いてあるが、さっぱり分からない。

扉のところには丸いエンブレムがつけられていた。

剣と杖が交差されたエンブレムだ。

「中に入りますか？」

「はい。一応依頼も受けちゃいたいので。それに魔獣使いの登録もしたいですし」

「あぁ、その子、魔力持ちでしたもんね」

扉を開け、ギルド内へと入っていく。

中は意外と普通だった。とても綺麗で、ちょっとした役所みたいな感じだ。受付は3つあって、その奥で職員たちがなにやら書類仕事をしている。端の受付の横には階段がある。

壁には紙がいくつも張り出されていて、中身は分からないがおそらく依頼だろう。

この時間は、冒険者達がいないのか、ガランとしていた。

「ルイ・カーライド、戻りました」
ルイが手前の受付嬢に冒険者証（ライセンス）を出す。
「おかえりなさい。ヘルキンスさんからの報酬を預かってます。銀貨２０枚、はいどうぞ」
「どうも～」
袋に入った銀貨が渡される。
「そちらの方は？」
受付嬢が、セシリアを指す。
「シンジーク街道で会ったセシリアさんです」
「どうも。セシリア・クレントです」
セシリアも冒険者証を出す。
「まぁ、リーランド出身なんですか」
「えぇ。フリーでいろんなところを旅してます。デリアンには長めに滞在するつもりなので、何度かお世話になると思います」
「これはご丁寧にどうも。私は受付のシーナ・アルトネンです。こちらこそよろしくお願いします」
シーナさんか。ロングの金髪で眼鏡の奥には優しそうな碧眼の瞳がある。大人のおねーさんって感じだ。俺よりも歳上だろう。っても、犬年齢でいったら1歳にもなってないんじゃないか、俺。

ちなみにシーナさん、巨乳だ。金髪碧眼眼鏡巨乳・・・。中々に・・・イイッ。

っと、思考がぶっ飛び始めた。自重しろ、俺。

「あの、私、魔獣使い登録したいのですが」

「魔獣のほうは今、いますか？」

「この子です」

急に持ち上げられる。シーナさんと目があった。

「わう」

『ども』

ペコリと頭を下げる。前足の付け根を持ち上げられているので、非常に情けない格好しているので、恥ずかしい。

「この子・・・魔獣ですか？普通の子犬にしか見えないんですが・・・」

「魔力は持ってます。・・・多分」

「分かりました。魔力の方を検査します。実戦で使える程度の魔力値を持っていれば、魔獣使いとして登録します。この子の名前は？」

「それが・・・まだ決まってないんです」

は？とシーナさんがぽかんとする。

「実は、この子今日拾ったばかりでして・・・」

と、俺との経緯を説明するセシリア。

「そういうわけでこの子の名前がまだ決まってないんです」
「困りましたね・・・。名前がないと、魔獣使いの登録ができないのですが」
まさか、名前を決めていないことがこんな所で障害になるとは・・・。
「うーん・・・でも、この子全然名前を付けさせてくれなくて・・・」
それは、セシリアのネーミングセンスの問題だっ！
「シンジーク街道で出会ったんですから、そこから取ればどうですか？」
ルイが案を出す。
「確かに。それならこの子もＯＫ出してくれるかも」
せ、セシリア、お願いだから、『ガイドウ』とかって言ってくれるなよ。
「じゃあ、ガイドウで！」
「・・・」
『・・・』
呆れてものも言えねぇ・・・。
「さ、さすがにそれはいくら何でも・・・」
「ガイドウはちょっと可哀想です」

シーナとルイが苦言を呈す。

「んーじゃあ、シン・・・とか？」

あー確かに、妥当な線だな。てか、シンか・・・。なんだか既視感を感じるなぁ。前世が眞也で、生まれ変わってシンか。まぁ、これなら呼ばれても違和感全然ないどころか、しっくりくるし、いいか。

ふと、死ぬ前の記憶が思い出された。

シン・・・か。あいつは元気にしてんのかなぁ。

「・・・やっぱりこれもダメ？」

っと、思い出に浸ってる場合じゃないな。

「わん！」

『それがいい！』

ついでに尻尾も振っておく。

「喜んでいるみたいですね」

シーナさんが微笑む。

「ようやく名前がつきました。ルイさん、いいアイデアありがとうございました」

「いえいえ、そんな大げさな」

シンか。なんかしっくり来るな、やっぱり。

「さて、名前が決まった所で、早速魔力値の計測をしたいと思います。シンにこの珠を触らせてください」
「シン、これに触るんだよー」

セシリアの腕から降ろされて、目の前に黒い珠が置かれる。
それに前足を乗っける。

と、体を何かが駆け巡る。それは血液にのって俺の体の隅々までに行き渡っていき、その黒い珠へと注がれる。

これが、魔力か・・・。なんとなく、俺はその流れが魔力なんだと分かった。

ぽうっと黒い珠が鈍く光りだす。

「もう足をどけて結構ですよ」

言われたとおりに足を離す。

「少々お待ち下さい。いま計測結果がでます」

おぉ・・・どきどきするな、これ。

「出ました。計測結果は・・・うそっ！？」
「な、何があったんですか！？」

セシリアがシーナさんに詰め寄る。
一体なんだって言うんだ、シーナさんの驚きようは・・・。

「魔力値・・・ランクBです」

それって凄いのか？

「え、マジかよ！？俺より魔力値高いの！？」

ルイが素っ頓狂な声を上げる。

「まだ、子供なのに、ランクBだなんて・・・。鍛えたら相当な強さになりますよ！」

「ま、ますます普通の犬じゃないわね・・・。真面目に高位魔獣の子供かどうか、検討したほうがいいのかしら？」

「うわぁ・・・俺も魔法得意な方だし、ランクもCでそこそこなのに・・・」

何やら、ルイが落ち込んでいる。

「まぁ、魔力値だけが強さを決めるものじゃありませんし、いくら高くても使いこなせなければ意味がありませんから」

そうなのか。なんだ・・・ぬか喜びしちゃったじゃないか。魔力の使い方なんぞ全く分からないぞ・・・。

「でも、これで魔獣使いの登録できますよね？」

「えぇ。なんの問題もありません」

「やったね！シン、これで晴れて名実ともに相棒だね！」

わしゃわしゃと撫で回される。そんなに喜ばれるとなんだか照れるな。しかも相棒だって。

「登録の前に、魔獣使いの説明をさせて頂きます」
「分かりました」
「少々長い説明になるかもしれませんが、ルイさんはどうしますか？」
「俺は上の階でいい依頼がないか探してますよ」
そう言ってルイは階段を上がっていった。

□　□　□

「まず、魔獣使いになると、指定宿にて2割引されます。それと、俊足、剛力と言った肉体強化系、千里眼、影消などといった感覚強化、補助系の魔法を購入時に幾らか割引されます。メリットはこれぐらいです。デメリットの方ですが、まず、パーティーが組み難くなる可能性があります。
冒険者の中には、魔獣使いは信用できないといった意見を持っている方もいらっしゃるので・・・。
マムズーやロックパピーなどを連れいる方はそんなに嫌煙されないのですが、大型の魔獣を使役している方だと、市民にも怯えられることも多いですし」
確かに、デカイ魔物を連れて歩いてたらビビるわな。俺がどこまで大きくなるかは分からないが、セシリアに迷惑かからない程度の大

きさであって欲しいよ。

「それと、万が一、使役している魔獣が暴走した場合、その責任はすべて使役者に掛かります。もし、暴走によって被害が出た場合、すべての賠償は使役者が負担することになります。冒険者証も剥奪です。最悪、投獄されることになりますので、魔獣の管理は厳重にお願いします」

うわぁ・・・。責任重大じゃん・・・。俺は暴れるなんて愚は犯さないけど、俺にここまでの自我があると分からないセシリアには結構な重荷だな。

「大丈夫です。うちのシンは頭いいですから、そんなことはしませんよ！」

あぁ、なんていい子なんだ！セシリア！

「さて、諸注意はついては終了です。最終確認ですが、魔獣使いとして登録しますか？」

「もちろんです！」

笑顔いっぱいで返事する。うーん、そこまで信頼されてるとは。こりゃ、早く使える”相棒”にならなくちゃな。

「了解しました。では、登録いたしますので、指輪を出してください」

「どうぞ。ところで魔獣使いってどのくらいいるんですか？」

「そうですね、デリアン支部所属だけでいうと、あなたを含めると１３人います。全体の１割程ですね。協会全体では１割もいないと思います」

すげぇ、なにも見ないで細かい数値までスラスラ出てきたぞ。できる女ってやつだな。

セシリアから指輪を受け取ったシーナさんは、奥で仕事をしていた男性職員に指輪と黒い珠を渡す。
あの人、耳が長いからエルフかな？

「今、指輪の方に情報を記録していますから、終わるまで少々お待ち下さい。上の階で依頼やデリアン周辺の情報を確認なさっても構いませんよ。終わり次第お呼びしますから」
「分かりました。上で待ってますね。シン、行くよ」
「わん！」
『がってんだ！』

と、ギルドの扉が勢い良く開けられる！

「・・・っはぁ、ま、まだ、はぁっはぁっ、受付・・・やってますか？」

息を荒げて入ってきたのは、眼帯をつけた茶髪の少年だった。背はセシリアと同じくらい。彼女より年下の印象を受ける。

と、その少年がこちらを見る。すると、ぽけーっとした表情になった。
セシリアが軽く会釈する。少年も慌てて頭を下げる。ってか、下げ過ぎだろ、それ。明らかに９０度近いぞ。

「シン、行くよ」

セシリアの後に続き、２階へと行く。

第六話　魔獣使い（後書き）

ギルドと協会（ギルド）の書き分けについて
組織全体を表す時は、協会。支部１つ１つを表す時はギルド。
となっております～

第七話　依頼

ギルドの2階は休憩室みたいになっていて、部屋の半分にはイスやテーブルが並べてあり、本棚も見受けられる。もう半分には衝立が並んでいて、いくつもの紙が張り出されていた。きっと依頼の紙だろう。
部屋の隅には受付があり、厳ついスキンヘッドのおっさんが座っていた。

「なぁ、ゼルさん、この依頼ってさ、なんでランクB以上対象に引き上げられたの？」
「あん？あぁ、それか。最近そこらへんでグリュプスの目撃情報があってな」
「うぇ、まじかよ。グリュプスって炎が苦手だっけか」
「あぁ。まぁ、お前が挑んだところで取り巻きのガルバードに八つ裂きにされるのがオチだ」
「失礼だな、ガルバートなんて俺でも倒せるよ」
「甘ぇよ、馬鹿。最低でも10羽はいるはずだ。やつら、群れになると厄介だぞ」
「うわぁ、キッツ・・・」

どうやら、依頼について話しているようだ。
2階にはルイのほかにも何人か、依頼を選んでいる人やイスに座って談笑している人たちがいた。
と、ルイがこちらに向かって歩いてくる。どうやら俺たちに気づいたようだ。

「セシリアさん、登録の方どうでした？」
「今、やってもらってます。指輪に登録が終わったら知らせてくれるそうです。それまで、依頼とかデリアン付近の情報でも見ようと思って」
「でしたら、ゼルさんに訊いてみたらいいですよ。デリアン周辺についてはギルド一詳しいですし、依頼の方もいいの出してくれますよ」
ということで受付のおっさんに話を聞くことになった。

□　□　□

「とりあえずは、今言ったことを気をつけてりゃ、ここでの仕事で困ることはないだろうよ」
デリアン周辺でよく見かける魔獣や気をつけた方がいい魔獣、実力がないうちは近づかない方がいい場所などについて詳しく教えてもらった。
ちなみに俺は受付の机の上に座っている。セシリアに上げてもらった。
「そういや、お前は魔獣使いなんだってな」
「はい。まだ登録してもらってる最中ですが・・・」
「そんなら、こんな依頼はどうだ？いい戦闘演習になるとおもうぞ」

ゼルさんは一枚の紙をセシリアに渡す。

「グラドッグの群れの討伐依頼・・・」

「最近、グラドッグの群れがここの近くの村に現れてな。そいつの討伐依頼だ。ランクはD」

「ちょうどいい難易度ですね」

「あぁ。お前一人でもこなせる依頼だ。まだ、その犬は戦うには弱すぎるからな。まぁ、ちょっとした演習だと思っていい」

「なるべく早く向かった方がいいですよね？」

「そうだな。長くても明後日には行ってほしい。村までは歩いても半日かからない」

「わかりました。依頼受けます」

「んじゃ、指輪を・・・ってまだできてないのか」

ちょうどその時、あの時のエルフの職員が2階に来た。

「セシリアさん、登録の方、終了しました。指輪をお返しします」

「どうもありがとうございます！」

「これからのご活躍を願っていますよ」

指輪を受け取ったセシリアは、指にはめると文字を浮かび上がらせた。

たしか、冒険者証（ライセンス）とかいうやつだ。

「おぉ！ちゃんと魔獣使いって書き込まれてるよ、シンの名前もあるよ！」

と、はしゃいで俺にその文字を見せるが、サッパリ分からない。

「おう、きたな。冒険者証はもう出してるみたいだな。依頼の登録

をしちまうぞ」
「お願いします」
ゼルさんは冒険者証をざっと読むと、
「問題なし。依頼は責任をもって果たしてくれ。幸運を」
「はい！」
無事に依頼を受けることができたみたいだ。
「ゼルさん、俺にもいいのくれよ」
「ルイか・・・」
そういえばルイも依頼を探しに来たんだっけ。
ゼルさんが何やらパラパラと紙の束を漁っている。
「あったあった。どうだ？こいつ行ってみる気はあるか？」
ゼルさんが、一枚の紙を取り出す。
「え・・・これって・・・」
「おう。コイツを達成すれば晴れてランクCだ。そろそろお前も受けていい時期だ」
「やった！！！」
「ルイさん、おめでとうございます」
「まだ喜ぶには早えぞ。依頼内容を見てみろ」
ニヤリと凄味のある笑みを浮かべるゼルさん。
「シエンの森に自生している、アミラ草の採取だ」

□　　□　　□

外に出ると、もう夜だった。明かりが少ない分、夜空には輝く星が空一面に散らばってる。日本じゃまず見られらない星の量だ。

「はぁ、受けるとは言ったものの、受かるかなぁ・・・」

さっきの依頼を聞いた時から何やらテンションが落ちているルイ。聞いた感じだと、そんなに難しそうな依頼内容じゃないと思うんだけどな。

「そんなに難易度の高い依頼なんですか？」

「いいや、依頼自体の難易度はCです。ただ・・・」

「ただ？」

「アミラ草をシエンの森で採取するのが問題なんです」

「どういうことです？」

「アミラ草ってデリアン周辺じゃよく見かける薬草なんですけど、ぱっと見、どこにでもある雑草と大差ないんですよ。ただ、見分けるの簡単なんです。魔力を流せばほんのり光るんです。けど、シエンの森じゃ、それができない」

「どうしてです？」

「シエンの森には吸魔コウモリにドレインワームとまぁ、ごっそりいるんですよ」

「あぁー確かにそれじゃ魔力をちょっとでも出した瞬間、根こそぎ

吸い取られちゃいますね」
「だから、肉眼で確認するしかないんですよ・・・。何気にあそこの森の魔獣、そこそこ強いから、時間かけて探している暇もないんですよ」

それって、難易度かなり高いよな・・・。

「まぁ、森の入り口付近にもあるはずですから、なんとかなると思いますよ」

そんなこんなで話をしているうちに目的地に着いた。

「ここがギルド指定の宿屋です。ここなら魔獣使いが割引されますよ」
「見た感じは普通の宿ですね」
「中が普通の宿よりも広かったりするらしいですよ」

ぬ・・・良い匂いがする・・・。
腹減った。繁華街には、時間が遅いからって行けなかったから、腹が極限に減ってる・・・。

「中には食堂もあるから、そこでご飯を食べるといいですよ」
「わざわざ案内までしてもらってありがとうございました」
「わん！」
『あざーす！』
「じゃあ、僕はこれで」
「はい。今日は本当に助かりました」

ルイが帰り、早速案内してもらった宿に入る。

ようやっと、ご飯が食べられるっ！

第8話　犬生最大の危機（前書き）

しばらく放置してしまいました・・・。申し訳ありません。

誤字脱字、その他何かありましたらご報告ください。

第8話　犬生最大の危機

大型の魔獣でも余裕で通れそうなドアを開け、中に入る。

さすが魔獣使い御用達の宿屋だ。玄関がかなり広い。というか、全体的に造りが大きい。

何やら良い匂いも漂ってくる。食堂でもあるのだろうか？

「いらっしゃい」

出迎えてくれたのは、ネコミミのおばあちゃんだ。・・・おばあちゃんだった。

初めてまともに出会った猫の亜人がおばあちゃんだなんて・・・。

別に老人が嫌いってわけじゃあ、ないよ、でも少しくらい夢見たっていいじゃないか！

「すみません、長期滞在したいのですが・・・」

「魔獣使いかい？冒険者証（ライセンス）見せな」

「どうぞ」

そんな俺の心などつゆ知らず、さくさくと宿泊手続を済ませるセシリア。

「1ヶ月ほど滞在したいんですが」

「構わないよ。1ヶ月ならギルドの割引ついて、銀貨20枚だね。

今全部払うかい？」
「あー、とりあえず5枚払います。残りは後で・・・」
「分かったよ。5枚なら1週間分だね。なるべく早めに頼むよ」
「分かりました。」
「部屋は2階に上がってすぐ右側の部屋だよ。食事の方はそこの食堂で食べられるよ。はいこれ鍵ね」
「分かりました。行くよ、シン」

早く荷物をおいて飯だ飯！！

部屋は意外と広く、俺が走りまわっても問題ない広さだった。鏡やベッドといった普通の調度品以外にも、止まり木や鳥かご、トイレ用と思わしき砂がある辺りさすが魔獣使い御用達。

「おぉ～中々いいお部屋だね！この止まり木とかは鳥の魔獣使い用かな」

セシリアは荷物を置き武器やら防具やらを手際よく外すと、顔を綻ばせながら部屋をうろつき回る。

この子、一人の時と他の人がいる時とじゃあ結構性格変わるってか、防御が硬くなるよなー
他人と話すときとかは、丁寧よりかは冷たい印象を受けるけど、一人でいる時とか俺に話しかけてくるときとかはあどけない女の子って感じだ。

ひと通り部屋を見終わったのか、バッグから財布を取り出すと

「そういえば、下に食堂あるんだよね、行こうか。お腹すいたし」

「ばう！」
『その言葉を待っていた！』
ようやく飯にありつけるぜ！
宿屋の1階とつながっている食堂は思っていたとおり、あまり人はいなかった。チラホラと見える人たちは皆魔獣使いのようで、肩に鳥が乗っていたり、中には猿もいた。バナナらしきものを両手に凄く嬉しそうだ。なんか和む。
食堂はちゃんと魔獣用のご飯もあるみたいで、魚と肉どっちがいいとセシリアが訊いてきた。俺は正直、人間と同じものが食べたかった。が、そんなことは伝わるはずもなく、結局、俺は肉の方を頼んだ。生肉がでてこないことを祈るだけだ。
席に座る（まぁ、俺は床に伏せてるんだけども）と皿に入れられた水を出された。が、犬らしく飲むのも心が人な俺には抵抗があり、どうやって飲もうかじっと水を睨むのだった。

□■□■□

精神年齢21歳、身体年齢生後1日・・・なのか？まぁ、俺がこの世界に来たって意味で1日で。
そんな俺は、早くも人生・・・もとい、犬生最大の危機に陥ってい

る。
そう、数分前までは食後の心地よい満腹感を感じていた、とても穏やかな時間だった――――――。

セシリアはご機嫌な様子で剣の手入れをしていた。久しぶりに食べたというまともな料理に大満足なのだろう。かく言う俺も大満足で、ベッドの上でゴロゴロしていた。あの上手に焼けた肉、美味かったなぁ・・・。

「こら。ベッドの上で転がらない。毛がついちゃうでしょ」
「わぅ・・・」
『あぁ、至福のベッドが・・・』

首根っこを掴まれベッドから降ろされる。
セシリアはどうやら剣の手入れは終わったようで、何やらバッグをゴソゴソと漁っている。

「あったあった」

と、取り出したのはタオルとおそらくアレは寝間着だろう。
風呂にでもはいるのかな？

実はここの宿、個室に風呂がついていたりする。普通、これぐらいの文化レベルだと風呂って貴族とかしか入れないものなんじゃ？さっき覗いた時は何やら魔方陣が幾つか書かれていた。多分、魔法を使って湯を沸かしたり水を出したりするんだろう。魔法超便利。

「あ、そうだ！」

そのまま風呂場に行こうとしていたセシリアだが、くるりと俺の方を向いた。
なんだ？覗きなんかしないぞ？
「一緒にお風呂入ろうか！」

――――――そうして、今に至る。

セシリアが魔法で作ったお湯を全身に浴びせられ、わしわしと体を洗われる。ちなみにセシリアは裸にタオル１枚を巻くという精神衛生上、非常に良くない格好をしている。

もちろん抵抗したさ！全力で！けど、
「だいじょうーぶ、水怖いかもしれないけど慣れれば平気だよ」
とか的はずれなこと言うと思えば、
「裸のお付き合いは大事だよ！」
とか、お前ひょっとして日本人なんじゃ的発言するし・・・。

そして何より、俺の体は子犬。いくら女の子でも俺を制圧するなんて容易いことだった。

「よーし、湯船に浸かりますか」

そう言ってタオルを脱い・・・って待て待て待て待てぇぇぇぇ！！！
全力で背中を向ける。ちらっと見えたモノは脳内フォルダーに焼付け、今は忘れることにする。

「怖がらなくていいよ。大丈夫、私が抱えるから溺れないよ」

別に怖がってるわけじゃないし、抱える！？
一瞬脳がフリーズ。その間にセシリアに後ろから抱きかかえられ、湯船に浸かる。
「はぁ～やっぱお風呂は気持ちい～」
せせせ、背中にに！！あ、あた、あったてます、セシリアさーーーん！
あ、意外と大きいんだな。って何を冷静なって考えてるんだ、俺！？
「勝手にいなくなったりしないでね、シン」
ポツリと泣きそうな声で呟かれたその言葉に俺のパンク寸前の頭が一瞬で落ち着く。
本当に微かにだけど、俺を抱きかかえる腕が震えている気がした。
「あはは、何言ってるんだろ、私。もう、シンが可愛いワンちゃんなのがイケないんだぞ」
俺を持ち上げると、目を見つめてくる。赤い瞳に吸い込まれそうになる。
「シン、これからよろしくね」
そう言って笑う彼女の頬に涙のあとがあった気がしたけど、きっとそれはお風呂のお湯がはねたんだと思うことにした。
ただ、返事の代わりに頬を舐めることにした。
セシリアはくすぐったそうにしてた。

俺はこの子のために何が出来るんだろうな。

第8話　犬生最大の危機（後書き）

この話で今年を締めくくることになるかもしれません。
まぁ、もう1話ぐらいは投稿できるかもわかりませんが・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9362y/

黒犬異世界奇譚

2011年12月27日21時45分発行